

## 記念講演

### 死と再生のプロセス

『チベットの死者の書』にみる人が死んでからの四十九日間

おおえ まさのり

一

ご紹介にあずかりましたおおえまさのりです。こういうところでお話しする機会がありませんいものですから、なかなか意を得て十分お話しできるかどうかわかりませんが、話の後で質問を受けながら『チベットの死者の書』の提起している問題点等について深めていくことができると思っております。よろしく願います。

『チベットの死者の書』は、昨年のお彼岸にNHKスペシャルでも放映されてご覧いただいた方も多いのではないかと思います。先ほどお話がありましたように、現在、高齢化社会や、ホスピス、臨死問題や、脳死問題ということで、死をどう見つめていくことができるのか、そのとき死の安心あんじんをどのようにして得ることができるのか、また死後の世界はあるのか、あるとすればそれはどのようなものなのかという関心が非常に高まってきていると思います。最近では永六輔さんが書かれた『大往生』という本がベストセラーになっておりますが、今日、葬送の儀礼が形骸化していく中で、私たちの魂はどうすれば本当に救済されることができるのかということが問題になっているように思い

ます。そういうものがないと、亡くなっていく人にとっては非常に大きな不安にかられてしまいます。かつては宗教というものが生きておりまして、魂の救済に坎する生と死の世界観や神話をもって私たちは亡くなっていくことができたのですけれども——そういうものがなくなってきたところに大きな問題があるように思います。

だいぶ前ですが、朝日新聞で、作家の井上靖さんが亡くなるときに娘さんに言ったという会話がコラムに紹介されているのを見かけたことがあります。それを読んでみます。

「昨年亡くなった井上靖氏は、死につながる昏睡に入る十分前、娘さんをびっしり見つめてこう言った。『大きな大きな不安だよ、きみ。こんな大きな不安にはだれも追いつけない。ほくだって医者だってとも追いつくことはできないよ。ほくはどうしたらいいかわからない。本当にどうしたらいいのだろうね』」

こういうことを娘さんに語って亡くなったと言われます。

それは、井上靖さんにしてそうなのかというよりも、井上靖さんだからこそ、生というものを見つめてきたからこそ、死というものに直面したときに大きな不安を見ながら亡くなったともいえると思うのですが、死に直面して私たちの魂が救済されないとしたら、本当に生きてきたことは何だったのかという大きな不安に駆られて、すべてが虚無の中に消えてしまうということに直面させられるのではないかと思います。

私自身そういう体験をもっております。私がそうした死に直面したのは三歳のときだったのですが、今からちょうど五十年前になります。戦争の末期で、本土空襲があったときの事です。夜近くの町が爆撃にあつて、その中を母に連れられて隣近所の人たちと一緒に逃げていました。そのとき小さな石橋があつて、その石橋のすき間に足をとられてころんでしまったのです。母は私の小さな妹を抱えて、それに夜の空襲であつたものですから、これに気づかずに隣組の人たちと一緒にそのまま逃げていってしまい、私はそこにたつた一人捨ておかれてしまったのです。向かいの町は赤々と燃えていますし、B 29の爆撃機が次々にくるといふ中でたつた一人捨ておかれて、そのとき初めて、

母親から離れた一人の自分といえますか、個的な自分というものに気づかされたのです。私にめざめたその瞬間、私の目の前に死が、死の恐怖がうずまいてるといいますか、生を与えられた瞬間に目の前に死をつきつけられるという実存的な不条理の中に放りこまれてしまったのです。

それ以後、死というものが、心理学的にいえば精神外傷的なものとして心に強烈に残って、死の問題を解き明かさないう限り、自分の生というものはない、自分の命というものはない、死によってすべては虚無の中に落としめられてしまつて、生には何の救済もないのではないか。そういう死の恐怖、不安というものが、ずっとまとわりついてしまいました。そしてまた小さいころ次々に従兄弟が亡くなつたり叔父や祖父が亡くなつたりということもありまして、小さなときから大学生になるころまで、次々に死というものに直面してきました。昔は病院ではなくほとんど自宅で亡くなつていきましたから、子供ながら死の現場をずっと見てきました。そういうときに、両親たちあるいは伯母たちはさまざまに仏教的な法要をしたり、いろんな供養をしていたのですけれども、そういうものを通して死後の世界はあるのか、あるとすればそれはどのようなものなのか、といった問題が自分の中にだんだん芽生えていったのです。そういう中で、死というものは自分にとって最も大きな問題としてのしかかつてきまして、それを解き明かさないと自分というものに出会えないだろうという予感がありました。そういうときに『チベットの死者の書』に出会うことによつて、自分の問題が絵とさうのように解き開かされていくという体験をもつたのです。

私にとつて『チベットの死者の書』は大きな意味をもつもので、私が初めて自分に出会うことを可能にしてくれたものです。

一一一

ところで、死者の葬送儀礼とか死後の世界についての世界観は、私たち人類が発生したときから始まつたといいま

すか、私たちが死という概念をもつことよって人類というものが始まったのではないかと思ひます。そういうふう  
に死は私たちが生に目覚める最も究極的な問題点であり、死があるから私は誰であつて、私はどこからきてどこへい  
くのか、といった問題を見つめることができるのではないかと思ひます。死がなければ私たちは生にも気づかないの  
ではないかと思ひます。それは、「生老病死」を見続けた釈尊もやはりそうだったのではないでしようか。その中か  
ら、生からの解脱という問題を釈尊は提言されたのではないかと思ひます。

かつて、仏教以前からですけれども、私たちの人類の多くはシャーマニズム的な世界に生きておりまして、死の向  
こうに私たちの命を支える根源的なものを見てきたのだと思ひます。そういう死後の世界にある何者かによつて私た  
ちが支えられている。そういうものへの恐れとそういう聖なるもの、大いなるもの、私たちのすべてを超えたものに  
支えられている私たち自身というものを見つめ、かつそういうものと一つになつて生きてきたのだと思ひます。しか  
し、私たちは現在そういうものを忘れてしまつていふように思ひます。本當の命の源泉、命の源に私たち自身が還えつ  
て、一人ひとりが命の泉の水を飲むということを忘れてしまつていふような気がします。

例えば、私がいま住んでいる八ヶ岳の方でも水がだんだんとダムで貯水された水にかわつてきました、塩素や農薬  
が云々されるようになってきました。しかし幸い、近くにすばらしい湧水があるものですからその水を汲んできて  
います。聖なる森に囲まれた湧水の水を汲むという行為によつて、水は單なる物質的な水ではなくて命の水であり、  
その命の水をいただいているんだという実感をもつことができますが、そうした深い命の源泉を私たちは忘れてしまつ  
ていて、そこに今日の問題の根本的な要因の多くがあるように思ひます。こうした源泉を汲みだす作業がさまざま  
宗教的修行体験の中にあると思ひます。『チベットの死者の書』もそうした生の源泉へ死を通してめぐりこみ、死と  
いう最も究極的な問題を通して、生というものの実態を明らかにしてくるのではないかと思つております。

「生と死を理解する鍵は、生命の源泉、最も奥深くにある心の本性にたちかえることであり、それが死の瞬間に起

こる」と『チベットの死者の書』はいつています。

私たちは心の本性にたしかえることによって生と死をその根底から理解することができのですが、それが死の瞬間に起こるというわけです。どうしてそれが死の瞬間に起こるかを考えてみようと思います。私たちは心の本性のうえにさまざまな仮面やベールをつけて生きています。社会に出ていくには、社会人としての仮面をつけないと、生きていくことはなかなか容易ではありません。そしてそのうち仮面の方がすっかり自分になってしまい、その仮面が自分のアイデンティティということになってしまっています。その仮面をはぎとることが、仏教における瞑想ではないかと思えます。仏教における瞑想とは、超能力を得ることで、またないものを得ることでなくても、私たちの内には仏性というものが宿っていて、その仏性を発見すればよいわけです。発見するためには、自我がつけている仮面をとっていけばいいわけです。新たに何かを得る必要はなく、むしろ逆にとっていくという消去的な作業によって、そこにすでにあるものが当然のごとくあらわれてくる、それがさまざまな仏教における瞑想法の基本ではないかと思えます。

こうした瞑想において、これが自分だと思いついてきたものがなくなるといふことは、私の死に他なりません。本当にそれまでであった自分がなくなることなのです。自分をなすりたせているアイデンティティや自我というものがなくなることは、個人にとっても大きな、まさに死の恐怖そのものであるわけです。自我というものにしがみついても、それがなくなれば自分がなくなるといふことですから、それは自己の死に他なりません。しかし、これが自分だといふものがなくなつたとき、本当に自分を超えた世界が見えてきます。これが自分だと思っておりますと、それだけの自分しか見えてこないわけです。

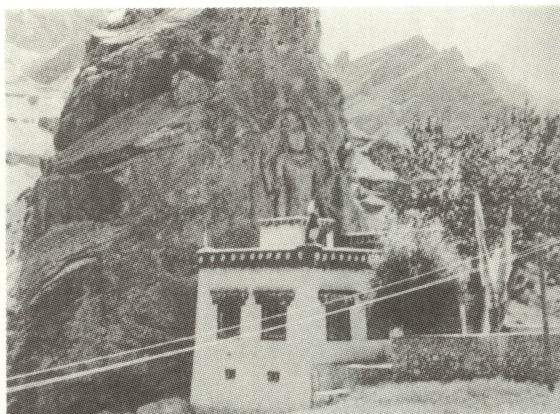
私たちはささいなものを所有して、これは自分のものだと思つていますが、逆にこれは自分のものだという概念を放棄することによって、世界のすべてが自分のものになる、ということが起こります。これだけは自分のものだと思つ

ていると、そうでないものが次々につくられていって、もつともつと自分のものをふやしていきたいと思いはじめます。自分のものという概念を放棄することによって世界全体が自分のものになるという精神的な変容がありえると思います。自分というものがなくなることによって、より大きな自分、さらには世界すべてが自分であるという大きな自分、さらには『チベットの死者の書』でいわれるような最も精髄的な叡知とか光明といわれるような、永遠の生命と一つになっている自分を発見することができるのではないかと思えます。こうしたものは自我の死というものが介在しない限り、あらわれてこないのではないかと思えます。

こうした意味で死というものが最も大きな意味をもっており、死の瞬間に、生命の根源にある「原初の光明」というものが輝きあらわれてくるのではないかと思えます。

瞑想体験や神秘体験、あるいは最近注目を集めている臨死体験の中で、「原初の光明」や「光の生命」を見るといったことが報告されております。また心理療法の中で、強制的に死を体験するといったことが行われています。仮死状態をつくりだすことによつて、死を受容しながら自分を越えた大きな世界を発見していこうというわけです。そういうテクニックがさまざまな心理療法の中でも使われておりますが、死はこうした自分を越えた世界を発見していく最も重要な鍵になるのではないかと思えます。

『チベットの死者の書』は、「枕経」であり、亡くなった人が再びこの世界に生まれ出てくるまでの間の死後四十九日間、死者の枕辺で唱えられます。亡くなった日から七日ごとに法要していって、四十九日で生と再生の間の中間的な状態である中陰が明け、満中陰となるわけです。『チベットの死者の書』はお葬式の経典にとどまらず、それを通して死者を真理に目覚めさせて、成仏させようとしています。そして一人ひとり本当にその真理に目覚めて、光と一体になり、光と溶けていかなない限り仏になることはできない、解脱することはできないと説き続けていくわけです。そういうところに『チベットの死者の書』の大きな意味があるのではないかと思っております。



スリナガルからラダックに向かう山中に見られる  
岩に掘られた仏

これから、チベットといいますが、西チベットのラダック地方に十数年前に行ったときのスライドがありますので、それを上映しながら話を進めていきたいと思います。

現在のチベットは、一九五九年に中国が侵攻し、その後文化大革命によって、チベットの仏教はほとんど壊滅状態になりました。ダライ・ラマ十四世をはじめとして、多くの人たちがインドに逃げて、現在ダラムサラに亡命政権をつくっています。しかしインドに組み入れられて残っていたチベットである西チベットのラダックには、かつてのチベットの文化が今も生きております。

インド側から行きますと大きなヒマラヤ山脈を越えるわけですが、そこにゾジラ峠があります。インド大陸とアジア大陸がぶつかって、インド大陸とアジア大陸の間にあった海底がそのまま隆起したところなんです。ですからこの山の上には岩塩が出たり、海底の化石が多く発見されたりしています。バスで行きましたが、インドのスリナガルから入って、四千メートル前後の峠を越えながら行きます。インド側はヒマラヤにモンスーンの雲がぶつかって雨が降ったり雪が降ったりしますから大変緑が豊かですが、峠を越えてヒマラヤの北側に出るとほとんど全く雨が降りません。一年にほんの数ミリという程度しか雨が降りません。ですからそちら側に行くと、いわゆる月の砂漠といえますか、月世界のような隆起した海底がそのまま崩壊している姿があります。本当に何もなくて、わずかな草で山羊やヤクを飼い、山

から流れてくる雪どけ水を集めて麦とか野菜をわずかばかりつくっているという暮らしです。

そういうふうにも何もないところですが、何もなければそこそ神とか霊といった精神的なものによって自分を支えていかなければ生きていけないといった風土があり、またそういうものを非常に大事にしている精神文化というのが今もあるように思います。私たち人間というのは、そういう精神的なものを本質においてすっかりともっていないといけないのではないかとつくづく感じさせられました。

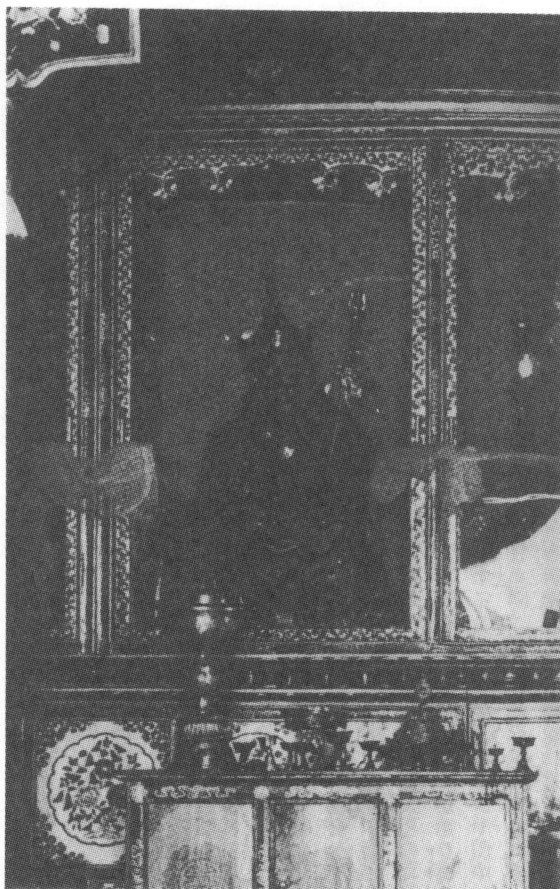
チベットにおいてはチベット仏教が大きな精神的機軸として生きていくように思います。チベット仏教は一般に西洋世界からはラマ教と呼ばれていますが、チベット人自身はラマ教とは呼びません。チベット仏教というタームで呼ぶわけです。どうしてチベット仏教をラマ教と西洋人が名づけたかといいますと、そこではラマというお坊さんが非常に大きな力をもっているからです。なぜかといいますと、私たちはラマであるお坊さんを通してはじめてブッダに出会うことができるわけですから、お坊さんが大きな力をもつようになり、そのためにほかの仏教と区別してラマ教というふうに西洋の人たちが名づけたのです。

そのラマ教は、日本に密教が入り始めた八世紀のころ、インドからパドマ・サムバーヴァ——蓮華の花の上に生まれたという意味ですが——彼によってチベットにもたらされました。その教えは古派（ニンマ派）といわれるのですが、後にパドマ・サムバーヴァの教えに対して、改革派（ゲルク派）といえますけれども、現在のダライ・ラマ十四世に受け継がれてきている新しい改革派が入ってきます。細かく見ていきますとさらにもっとたくさん派があるのですが、大きくは古派と改革派に分かれて現在に至っております。

この『チベットの死者の書』は、八世紀パドマ・サムバーヴァによって著されたものが、十四世紀になってカルマ・リンバによってヒマラヤの山の中から発見されたとされ、いわゆる埋蔵経典だということになっております。

埋蔵経典というのは、偽経ではないかということが指摘されているわけですが、埋蔵経典というスタイルはチベッ

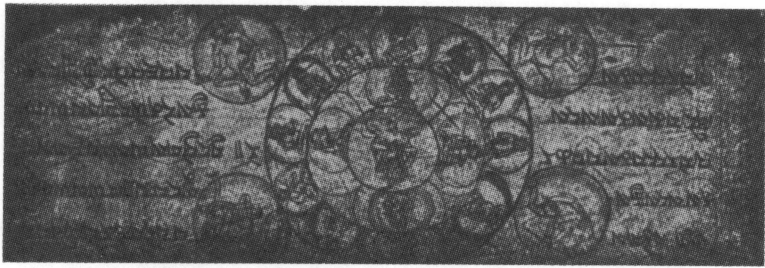
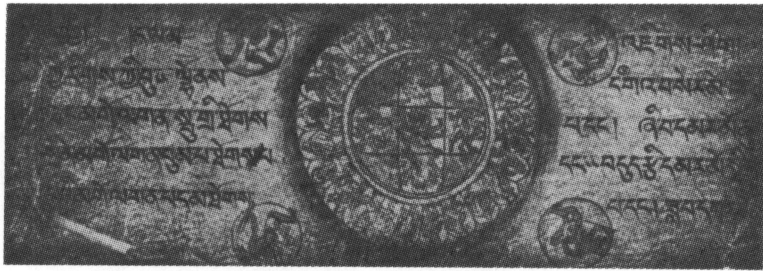




「死者の書」を著わしたと伝えられる  
パドマ・サムバーヴァ

ト人にとって仏教の源から生々とした教えを汲み出していく方便ではないかと思えます。

例えば仏典を見ていったときに、仏典というものはすべて「我是の如く聞けり（私はこのように釈尊から聞いた）」というふうにして書かれておりまして、釈尊自身が書かれたものはないわけです。その釈尊の教えを弟子たちがどういふふうに進めようかというところが問題になるわけです。その読み取り方といえますか、釈尊の教えを非常に創造的に読み取ること、小乗から大乘、そして大乘から金剛乗といわれる密教などのさまざまな教えがあらわれ出てきました。こうした読み解きによって仏教は常により創造的、よりダイナミックなものに変遷してきたのだと思



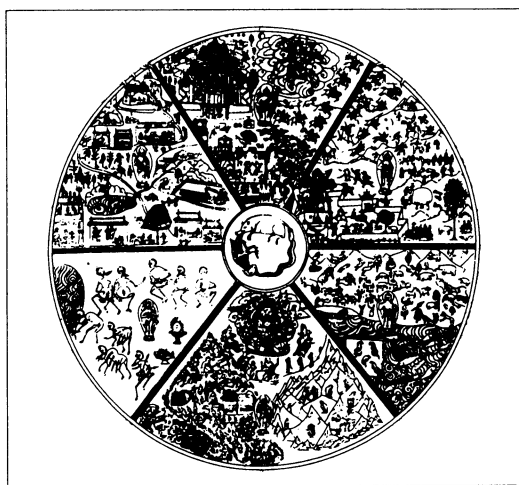
『チベットの死者の書』の原本。平和の神々（下）と忿怒の神々（上）

ます。こうしたブツダの教えの源泉へともぐりこんで、それと一つになって、釈尊の教えを体験して、そこから生き生きとした仏の教えを汲み出してくる。こうした作業が続いてゆかない限り、仏教もまた形骸化していくのではないかと思えます。

そういう意味で、埋蔵経典というのは、常に仏教を新しくしていくチベット人の知恵ではないかと思っております。ですからそれがどこまでブツダの真理を汲み出しているか、ブツダの源泉からブツダの本質を汲み出しているかという問題として、論議されるべきではないかと考えております。

#### 四

『チベットの死者の書』は、チベット語では『バルドゥ・トエ・ドル』といわれます。バルドゥというのは、人が亡くなってから再び生まれてくるまでの間の四十九日間のことをいいます。日本では「中有」、中間的な存在、あるいは「中陰」といわれ、その中陰において死者の魂を際限なく輪廻転生していくこの迷いの世界から、生滅



六道輪廻図

を越えた世界、成仏といわれる世界に解脱させていくために死者にさまざまな導きをするのが本書の目的です。そして『チベットの死者の書』は、輪廻から離脱できる最高の好機が死の瞬間にあるといい、死の瞬間に最も大きな意味をおいています。

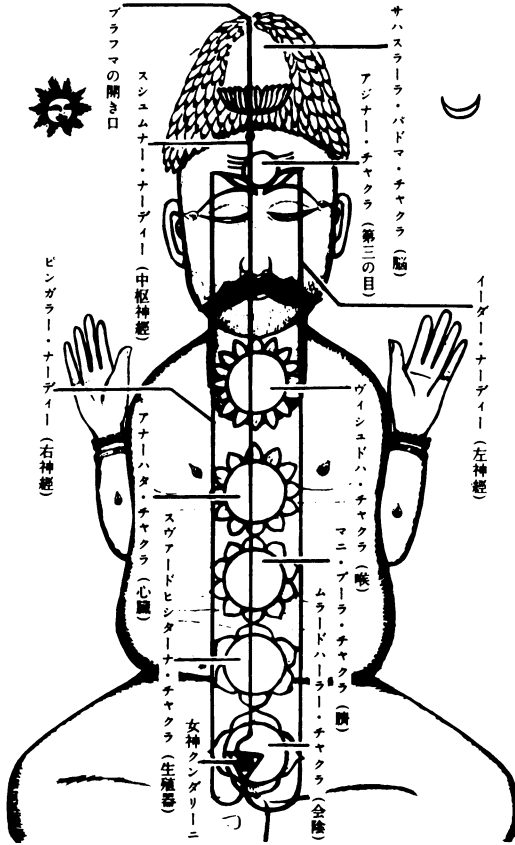
この図はチベットの六道輪廻の図ですが、チベット仏教では私たちの世界には、六つの「バルドゥ」があるとされています。バルドゥというのは存在の中間的な状態ですけれども、この私たちの生きている存在世界も一つのバルドゥである、迷いの世界であるというふうに考えております。そして「死の瞬間のバルドゥ」。それにひきつづく「存在の本性を経験しているバルドゥ」、四つ目に、この世界に生まれようとしている間の「再生を求めているバルドゥ」、そして「夢見のバルドゥ」、「瞑想のバルドゥ」という六つのバルドゥがあるというふうにいわれております。死のプロセスの三つのバルドゥを経験すると言われております。

これから死後四十九日間の実験的な法要次第を追いながら、『チベットの死者の書』の概略を見ていききたいと思います。

チベットでは、死ぬとき、人の魂は体の九つの開き口、眉・目・耳・鼻・口・肛門・尿道・へそ、そして頭頂にあるブラフマの開き口のいずれかから逝去してゆくと考えられています。首より下の出口から魂が出ていくと、畜生

界や餓鬼界や地獄界に落ちると考えられています。頭頂から魂が逝去してゆくのが最もよく、頭頂から魂が出ていくようにとすることで、そのために生前に「ポワ」という実修を受けておくようにといわれています。

私たちの人体にはヨーガやタントラの考え方ですが、スシュムナ管という精神的な神経水路が図のようにおなかから頭頂まで走っています、その節々にチャクラといわれる神経のセンターがありまして、頭頂のところと眉間の間、のど、心臓、おなか、生殖器、そして会陰のあたりと七つのチャクラがあるとされています。その胸のチャクラのところ星のように光る小さな星を観想して、そのしずくをスシュムナ管を通して頭頂に飛び出させてゆくので



無上ヨーガ・タントラの小宇宙観  
 を示す心霊神経とチャクラの図

す。頭頂の上には阿弥陀如来を観想しまして、心のしずくと阿弥陀如来とを合体していくようにします。何度も心のしずくを飛び出させながら阿弥陀如来と合体していくという作業を繰り返すわけです。こうした実修をしておく、亡くなったとき魂はブラフマの開き口から出ていくとチベットでは考えられています。しかし多くの人たちはこうした「ポワ」を実修する機会にめぐまれないものですから、亡くなったときに『チベットの死者の書』という枕経によって導かれる必要があるわけです。

亡くなっていくとき、死の瞬間が最重要な瞬間です。しかし死のときに死の恐怖から失神して気絶してしまうと、そこであらわになってくる心の本性を全く認識することができません。それで死におもむくときに、のどの左右の動脈を圧迫して、できるだけ眠りに陥らないようにさせます。死の瞬間には、「原初の光明」といわれる、法界からあらわれ出てくる最も精髄的な根源的な叡智というものが輝くわけです。それを認識して光と一つになることによって、私たちは生死のカルマの業から解脱できるのですが、そのとき失神してしまうと原初の光明を認識して解脱することができません。そのために死の瞬間に目覚めているということが重要視されます。といってもなかなかそうすることはできず、死の瞬間に僧侶が立ち会っていれば、僧侶はポワの行を死者に施します。ポワの儀式を施すことによって、死者の魂をブラフマの開き口から逝去させてやるわけです。

死の瞬間に死者の中でどういうことが起こっているかを、『チベットの死者の書』には次のように述べてあります。読んでみます。

ああ、善き人よ。今や汝にとって、存在の本性を求める時がやってきた。(中略) ああ、善き人よ。聴くがよい。今汝は、真の存在の本性の〔原初のクリヤー・ライト(眩しく輝く光明)〕の発光を経験している。それを認識しなければならない。

ああ、善き人よ。本性が空、生来の空であり、何らかの特徴や色へと形づくられない汝の現在の知性は、存在

の本性そのもの、妙善なる母（原初の母仏）である。

何もないという空としてではなく、妨げられず、輝き、血沸き肉躍り、至福に満ち、知性それ自身としてみなされる空である今の汝の知性は、真の意識、妙善なるブッダ（原初の仏）である。

本性が空であり、何ものにも形づくられない汝自身の意識と輝き至福に満ちた知性、これら二つのものは分けられない。それらの融合が完全な啓発であるダルマ・カーヤ（法身）の状態である。

輝き、空であり、発光の無上の体から分ちがたい汝自身の意識は、誕生も死もない（不変の光——ブッダ・アマターバ（阿弥陀如来））である。

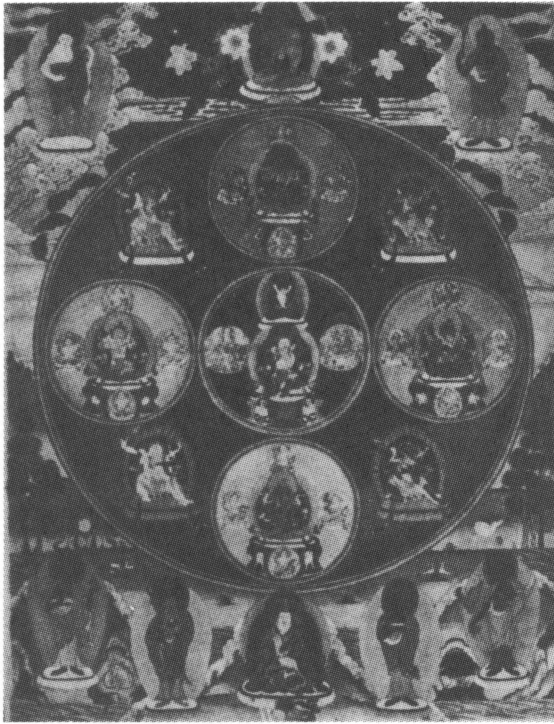
死者はこうした眩しく輝く光体験をしているわけですが、死者はその眩しく輝く光を認識することができずに、おびえ、恐怖してしまいます。そこで、それが何であるかを僧侶が導いていかななくてはなりません。

光を見る死の瞬間に、ほとんどの人は失神してしまってそれに気づくことができませんが、その期間は約三日半から四日半続くといわれております。そして三日半から四日半して目覚めた死者には、存在の本性を経験しているバルドゥといわれる、さまざまな平和の神々、大日如来とか、阿弥陀如来、宝生如来といったさまざまな如来や仏があらわれて、死者を迎えにやってきます。

この図はチベットの曼陀羅ですが、曼陀羅の中心には大日如来がおられます。このチベットの曼陀羅は東西南北の描き方が日本とは違っていきまして、下が東になっています。中心の大日如来の下の、東の方に阿閼如来、左方の南方に宝生如来、上方、西方に阿弥陀如来、そして右方、北方に不空成就仏がおられます。この曼陀羅に描かれた如来たちが、一日目から七日目にかけて毎日死者を救済し、成仏させるためにあらわれてきます。

一日目の大日如来があらわれてくるところを読んでみようと思います。

ああ、善き人よ。汝はこの三日半の間失神していた。汝がこの失神から回復するや、汝は何が起こったのかと



一日目から二日目にかけて死者を迎えにやってくる  
平和の神々の曼陀羅

いう考えを抱くであろう。汝はバルドゥを認識しなければならぬ。このとき現象は全く違って経験されるであろう。ここで汝が見る現象のあらわれ方は光や神々である。全天は深みのある青色に見えるであろう。「あらゆる現象の種子を撒き散らす中心国土（法界——存在の根源）」から、色は白で、獅子の王座に座り、手に八輻の輪を持ち、「天空の母（宇宙の女性原理を象徴する神妃）」に抱きしめられた（バガヴァーン・ヴァイローチャナ（毘盧遮那仏——大日如来）」が汝の前に現れるであろう。

それは青色の光である原初の状態へと帰着していく意識の集まり（識蘊）である。（父母ヴァイローチャナ（大日如来父母神）」の心からやってくる法界（存在の根源）の智慧が、色は青色で、透明で華々しく輝き、眩しく前方に放射されて、汝を刺し通すであろう。それはあまりにも眩しく、汝はほとんどそれを見つめることができないであろう。

その光と一緒に、汝を刺し通す天上界からの白い白光も輝いているであろう。そして悪いカルマ（業）の力のゆえに、法界からの智慧の輝かしい青色の光は、汝に恐れと怯えを起こさせ、汝はそれから逃れたいと思うであろう。そして汝は天上界の白い白光に対して愛着を抱くであろう。

非常に眩しく輝く光ですから、死者はおそれて、そうではない鈍く輝く天上界からさしてくる——天上界もまた輪廻の一つなのですが——その光の方に死者は魅惑されていってしまいそうになります。

そして二日目には、阿閼如来があらわれて、死者を救済にやってきました。しかしそのとき同時に、地獄界からの鈍い煙色の光もさし込んできます。そして死者はその煙色の光の方に魅惑されてしまいそうになります。もし鈍い地獄界からさしてくる光の方に魅惑されてしまいますと、地獄界に生まれることになります。そこでその光に魅惑されてはならないという教えが執拗に三回から七回にわたってくりかえされます。

三日目には、宝生如来が死者を救済にあらわれてきますが、同時に、人間界からのくすんだ青みがかった黄色の光





も死者を迎えにやってきました。そして四日目には、西方の国土の阿弥陀如来が眩しく赤い光を発しながらあらわれてきて、そして同時に餓鬼界からのくすんだ赤の光もさし込んできます。五日目には、北方の国土から不空成就仏が死者を迎えにやってきました。そしてそれと同時に阿修羅界からのくすんだ緑の光も一緒にさしてきます。六日目には、一日から五日目までにあられた大日如来、阿閼如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就仏が一斉に死者を迎えにやってきました。そして同時に、天上界、阿修羅界、人間界、畜生界、餓鬼界、地獄界のくすんだ光も死者を迎えにやってきました。そして七日目には、聖なる極楽浄土から眩しく輝く虹の光を發して、知識保持の神々が死者を照らしにやってきました。

こうした平和な様相をした神々が死者を迎えにくるわけですが、この七日間に眩しい光と一つになり、それと一つになって成仏して解脱することができなかった死者には、それに引き続き忿怒の神々、怒り狂った神々の夜明けがあらわになってきます。

## 五

この図が忿怒の神々の曼陀羅です。これらの神々は、先ほどあらわれてきた平和の神々が死者の意識を反映して、忿怒の様相をしてあらわれてきたものです。本質的には大日如来であり、阿弥陀如来なのですけれども、死者のより不純な意識が投影されることよって怒りの様相をもってあらわれてきたものです。そして先にあらわれてきた平和の神々、大日如来とか阿閼如来とか宝生如来もまた、原初の光明が死者の意識を反映してそこにあらわれてきたものと『チベット』の死者の書』はいつています。神々は死者自身のどこか外からあらわれてくるのではなく、原初の光明を見る死者の意識が不純なために、その意識を反映してそこに大日如来があらわれてきたり、宝生如来があらわれてきたり、あるいはまたさらに死者の意識がさらに不純になってくると、それが忿怒の様相をした神々、さらにもつ